



12月1日(水)に県教委主催の英語力向上事業「英語能力測定テスト(英検 IBA)活用研修会」が開催されました。今回は、その中で説明があった「指導と評価の一体化」に向けて、特に留意したい点について英語科担当者全員で再確認したいと思います。



「主体的に学習に取り組む態度」の評価が
まだ不安だなあ・・・

「主体的に学習に取り組む態度」は、次の2つの側面から評価することが求められます。

- ① 知識及び技能を獲得したり、思考力、判断力、表現力等を身に付けたりすることに向けた粘り強い取組を行おうとする側面
- ② ①の粘り強い取組を行う中で、自らの学習を調整しようとする側面

【学習評価の在り方ハンドブックより】



「粘り強い取組を行おうとする側面」

とは、例えば、話すこと(やりとり)の場面で、「ジェスチャーを使ったりして相手に伝えようとしている」、「他の語句に言い換えて伝えようとしている」、書くことの場面であれば、「発表内容を何度も校正している」等のような姿をイメージすることができます。

単元導入時の意欲や挙手・発言の回数、忘れもの、ノート・ワークの提出率などの表面的態度は「主体的に学習に取り組む態度」の評価に含まれません。

「自らの学習を調整しようとする側面」とは、

児童生徒が自分の学習状況を把握し、学習の進め方について試行錯誤するなどの意志的な側面です。評価に当たっては、児童生徒が自らの理解の状況を振り返ることができるような発問の工夫をしたり、自らの考えを記述したり話し合ったりする場面、他者との協働を通じて自らの考えを相対化する場面を単元の中で設けます。例えば、振り返りで、「うまく書けた理由、うまく書けなかった理由、工夫したこと、今後改善すべきこと」などの記述から見取ることも考えられます。



「主体的に学習に取り組む態度」は、基本的に、「思考・判断・表現」と一体的に評価しつつ、言語活動への取組状況を観察したり振り返りの記述を分析したりして、その結果を加味することになります。他の観点から切り離し「主体的に学習に取り組む態度」として評価することは適切ではありません。

例えば、「書くこと」の評価の場面で「思考・判断・表現」がCであっても、振り返りの記述などに「最後まで書いてから、教科書や辞書を使いながら書き直すようにしている。」のように、自己調整の姿がみえる場合は、「主体的に学習に取り組む態度」がBになることも考えられるということです。

最後に「主体的に学習に取り組む態度」の評価において留意すべき点を挙げます。

◆言語活動において評価すること。

言語活動以外の場面を評価していませんか？

◆「粘り強く取り組んでいる具体的な姿」、「自己調整している具体的な姿」をあらかじめイメージすること。

そのような児童生徒の姿を見逃していませんか？





言語活動の捉えがよく分からないな・・・



前の学習指導要領では、「言語材料についての知識や理解を深める言語活動（ドリル的な活動）」と「考えや気持ちを伝え合ったり，意思の伝達を行ったりする言語活動」と，2つの言語活動が位置付けられていました。しかし，現行の学習指導要領では，前者の「言語材料についての知識や理解を深める言語活動（ドリル的な活動）」は，言語活動とはみなされませんので，十分留意が必要です。（そのような活動自体が否定されるものではなく，生徒の実態に応じて取り組ませることになります。）

言語活動は「知識及び技能」を活用し，「思考力，判断力，表現力等」を育成するために取り組ませるものです。したがって，外国語科で扱われる活動がすべて言語活動かというところではありません。言語活動の具体例は，学習指導要領解説 2内容(3)言語活動及び言語の働きに関する事項(P58～74)で，5領域ごとに分かりやすく示されていますので，もう一度目を通しておくとよいです。

言語活動に取り組ませるときに・・・

生徒自身が表現内容を考えていますか？

その内容を英語でどのように表現するとよいのかを生徒自身が考えていますか？



⇒**英作文のフレームや対話のフォーマットを与えすぎていませんか？** by 文科省山田教科調査官

例えば，to不定詞を扱う単元において，「思考力・判断力・表現力」を評価する場面では，to不定詞を使って表現させることにこだわる必要はありません。その「目的・場面・状況に応じて」表現することが大事です。to不定詞の用法を理解し，正しく使っているかは，「知識・技能」で評価することになります。

指導に生かす評価ってどういうことかな・・・



今回の学習指導要領改訂にあたり，評価について，「毎時間記録に残す評価は行わなくてよいが，指導に生かす評価については，随時行うこと」とされました。

英語科は「言語活動を通して」評価することから，単元の最終ゴール（パフォーマンステスト等）に向かって，**同様の言語活動に繰り返し取り組めるような単元計画であることが大前提**となります。そうでないと，「指導に生かす評価」が不可能になります。「指導に生かす評価」は，生徒の学習改善，並びに，指導者の指導改善につながるものです。例えば，書くことの言語活動でBの状況に届いていないと判断した生徒がいたときは，どこでつまづいているのかを把握し，適切な手立てを講じ，この次に評価する時には，B以上になることを目指します。生徒が「なるほど，このようにすれば，書けるんだ。」「今度は自分で書けそうだ。」となるように。そして，指導者も，「次の授業で，こうすれば，〇〇さんも書けるかもしれない。やってみよう。」と，**生徒の学びと教師の指導を再構築**していくわけです。「今はできなくても，失敗しても，大丈夫。一緒にがんばろう！」というメッセージを生徒に伝え続けます。「指導と評価の一体化」とは，まさに，このことです。単元終末の「記録に残す評価」は，当然，大事ですが，そこへ向かうまでの過程で行っていく「指導に生かす評価」の充実こそ，学習指導要領で最も求められていることです。そう簡単なことではないかもしれませんが，“トライ＆エラー”を合い言葉に進めていきましょう。



☆これからも疑問に思っていることや悩んでいること，工夫してうまくいったことなどみんなで共有していきたいと思います。